

調査団体名	矢作川水族館・ 家下川リバーキーパーズ		団体代表者名	阿部夏丸 館長	
設立年	2007年		団体URL	http://www.yahagi-aqua.com/	
活動地域	矢作川流域		会員数	10名程度	
取材日	2009.7.7 (家下川)	レポート作成者	近藤朗	調査員	近藤朗
<p>&lt;現在どんな活動をしているか&gt;</p> <p>水槽は持たず、ネット上に電子水族館を開設。魚に触れたければ、ぜひ矢作川に足を運んでくださいという。ただし、本物の魚を見てもらいたいときには、屋台風の軽トラ水族館を出動させている。組織は、研究者や小説家など多彩で個性的なメンバーで構成されるが、キーワードは矢作川が好きなこと。市民に矢作川の楽しさ、面白さを知ってもらうため、河川での実践活動とHPによる発信が行われている。HPの内容は、矢作川の魚を紹介する「ネット水族館」や、魚とりのための「ぼんつく入門」、調査・活動を紹介する「水族館記」、「水族館ブログ」などの他、独自に行う「アメリカナマズの調査報告」も掲載されている。</p> <p>また、矢作川水族館は「矢作川の魚にとって一番大切なのは、産卵場所である支流だ」と考え、支流や水路の保全を訴えている。その手はじめに、家下川周辺をモデル地区と定め、家下川周辺の農業用水路の環境保全に取り組んでいる。土地改良区に行った水田魚道の設置をきっかけに、三面張り水路である小川(榎塚川)に魚の生息環境を手作りで復元(2009年7月5日)。メダカのあるかえる水路の実現にこぎつけた。参加者は組織団体にとられず、地元ボランティア、豊田土地改良区、豊田市河川課、愛知県農林水産事務所、豊田加茂建設事務所、矢作川研究所、矢作川水族館など。これが家下川リバーキーパーズである。</p> <p>メンバーの阿部夏丸館長、矢部隆氏(愛知学泉大学)は、三河淡水生物ネットワークのメンバーでもある。阿部氏はネットワークでの活動報告として矢作川でのアメリカナマズの捕獲調査、体長と年齢による分布を紹介。生息域、生息地、移入経路、食性及びその食味を披露された。今後も調査活動を続けるとのことである。(2009年11月21日)</p> <p>また、アメリカナマズの正式な調査報告は、矢作川研究所のシンポジウムで酒井博嗣氏により発表。(2011年2月5日)</p>					
<p>&lt;会のモットー(何を大切にしているか)&gt;</p> <p>矢作川を愛すること。魚に価値を定めず、こよなく愛すること。現場が第一であること。</p>					
<p>&lt;設立から現在に至るまでに変化したこと&gt;</p> <p>大きな変化は求めず。ゆるやかに流れる矢作川のごとく、真っ直ぐ海へと向かうのである。</p>					
<p>&lt;連携している団体・専門家・自治体など&gt;</p> <p>豊田市矢作川研究所、豊田市天然鮎調査会、矢作川漁協、土地改良区、豊田市自然観察の森、矢作新報社など</p>					
<p>&lt;今までに行った調査・研究&gt;</p> <p>矢作川、家下川などでの魚類調査(HP公開) アメリカナマズ駆除のための調査研究</p>					
<p>&lt;現在直面している課題&gt;</p> <p>矢作川水系での外来魚対策(アメリカナマズ等)。人手不足もさることながら、行政の腰の重さに閉口している。</p>					
<p>&lt;今後やってみたいこと&gt;</p> <p>軽トラ水族館の小学校などへの巡業活動。 市民が川に遊びに行きたくなるような、リアルで楽しい情報の発信など</p>					

<そのためにはどんな情報・人脈が必要か>

正しい川の情報を知るためには、充実した活動を行うには多くの人の手が必要となる。ただし、人を増やせばいい、ネットワークを広げればいいというものでもない。あわてず、あせらず、矢作川を愛する人を育てる努力が、必要である。

<カウントダウン2010に一緒に取り組みませんか？>

11月21日の三河淡水生物ネットワーク例会でカウントダウン事業の広報を実施した。生物多様性CBD・COP10そのものに振り回されるのは嫌である。ただし、そのことで行政がちゃんとした取組を行うこと、また私たちの声に応じてくれるのであれば、それは活用したい。重要なことはCOP10が終わった後も、この地でその精神が引き継がれることを望みたい。

<その他、伝えたい事>

COP10を開催すると言うことで、水田魚道設置を当局が申し出てきた。魚道を設置するだけではダメで、小川の環境そのものを見直さなければいけないということで、リバーキーパーズが始まった。川は海まで切れ目なくつながっているのだから、河川管理者、行政もつながるべき。行政と市民が現場で川を考える、現場で汗を流す。そんな機会をつくりたいと考えている。

【参考】外来魚対策について、阿部夏丸さんとともに琵琶湖博物館中井克樹学芸員の話を伺った(11月19日)。その内容は以下の通りである。

市民、あるいは研究者一人一人ができることは、問題の所在を知り、自分の関心のある分野で価値判断の物差しを確立させることが大切である。生きものとの関係に必要なのは、個体との距離感の保ち方、命の取り扱いをめぐる葛藤、生物多様性の背後にある歴史性の観点から自分自身の考え方を整理することである。研究者の自戒としては、何故迅速な対応が難しいのか、行政は様々な問題を抱えており、その対応を値踏みするからである。外来種などの問題を放置するリスクについて、先行事例や専門家の助言を基にしながら「対応すべきか」というリスクの重み付けを示さなければならない。これは、リスクの大きさとその発生確率によってくるだろう。ただ単に対応した方が良いというだけでなく、すべきだということ示すという点で、研究者も市民団体も努力が必要だという反省がある。(努力不足)



アメリカナマズを捕獲した矢作川水族館メンバー(右から二人目が阿部夏丸氏)